

◆ 東経ビジネススペシャル鼎談
北村弁護士と語る「顧問弁護士のススメ」



「火種が小さなきに
的確に消せる。
それが顧問弁護士を持つ
メリットです」

弁護士 北村 晴男氏 (株式会社ダック技建 顧問弁護士)
プロフィール (きたむら・はるお)
1956年生まれ、長野県出身。早稲田大卒。86年司法試験合格。弁護士法人北村・加藤・佐野法律事務所所属、東京弁護士会。日本テレビ系列「行列のできる法律相談所」などテレビ出演多数。

創業から9年あまり、着実に成長を続けている北九州市の管工会社・株式会社ダック技建(徳永明彦社長)は、その経営をさらに強固で確実なものとするために、顧問弁護士にテレビ番組「行列のできる法律相談所」などで活躍中の北村晴男弁護士を迎えた。民事から保険、交通事故、債権回収、企業法務に至るまで幅広く活躍している北村弁護士は、誠実で気さくな人柄で人気を博しており、徳永社長にとってはなんでも相談できるパートナーとして、強力な支えとなっている。ゴルフの好敵手でもある2人に、本誌発行人の越智英雄が話を聞いた。

ゴルフのラウンドで
意気投合

越智 北村先生がダック技建の顧問弁護士に就任されたきっかけは何だったのでしょうか？

北村 昨年4月に若松で開かれた北九州オープンというゴルフのトーナメントに出場させていただいたのですが、その試合の練習ラウンドに、徳永社長にお付き合いただいたのが最初です。小倉の友人にお願いで練習ラウンドのコースを取っていただいたときに、その友人の紹介で一緒にラウンドさせていただきました。

徳永 スタートの直前まで降っていた雨が上がったのでラウンドでしたが、北村先生はゴルフに対する姿勢が、

北村 まず、今回のように信頼する知り合いに、その人の信頼する弁護士を紹介してもらうのが、一番間違いないでしょう。次に、弁護士会に紹介してもらう方法で、この方法のいいところは、弁護士会は極端に悪い弁護士は紹介しない、という点です。残念ながら弁護士の中にも極端に悪いのがいますので、それを避ける安全策で、平均点以上の弁護士を紹介してもらえないはず。そうやって紹介してもらった上で、その後、大事なものは、実際に事件・事案の相談や打ち合わせの中で、もし少しでも「あれ？ ちょっとおかしいかな？」と感じるようなことがあれば、別の弁護士に相談してみることが大事です。それと、弁護士を頻繁に使っている人にアドバイスを求めることですね。

越智 徳永社長は、北村先生にはどのような相談を？

徳永 訴訟になるような事件はありませんが、取引先やグループ会社などの債権債務に関する状況判断などの確かなアドバイスをいただいています。また、ゴルフや食事をしながら

北村 顧問先が複数あると、私も訪問しやすいですから、ありがたいです。

越智 多くの企業の顧問をされていると思いますが、九州での顧問先はダック技建が初めてですか？

北村 そうです。

経営者が陥る
法律の落とし穴

越智 今回は知人の方を通したご

北村弁護士と契約したことで
自分自身の中に
ゆとりが生まれました

徳永氏



本誌発行人 越智 英雄
東京経済代表取締役社長

株式会社ダック技建 代表取締役社長 徳永 明彦氏
プロフィール (とくなが・あきひこ)
1947年生まれ。66年西日本鉄道株入社。71年西本建設工業入社後30年の勤務を経て、2001年(株)ダック技建に入社とともに取締役就任。翌02年代表取締役社長に就任。趣味はゴルフ。

ら、移動中など、ちょっとした会話の中でもためになるお話を聞いています。

越智 中小企業の経営者には、顧問弁護士と契約するということがそのものが意識の中にならぬ場合も多いかと思えます。中小企業にとって、弁護士の先生と顧問契約を結ぶというのは、具体的にどのようなメリットがあるのでしょうか？

北村 最大のメリットは、火種が極めて小さいうちに気兼ねなく相談できるということですね。そして万一、ちょっとした火の粉が降りかかってきたときに、断られることなく責任を持って事件を処理してもらえらるること。

物事は、火種が小さいときに的確に処理をしないと、大火事にならず、お金もかかりません。私が見る限り、多くの中小企業の社長さんは創業者がほとんどで、そういう人たちは「自分ですべてできる」という全能感を持っておられます。こういう経営者は、大きなワナにはまりやすいのです。極端な例を挙げると、裁判所から訴状が届いているのにほったらかしにしてしまつて、欠席判決を受けてしまつてもいます。会社の業績が伸びていて、有能な経営者といわれている方ほど、そうなんです。うまくいっているとき

は、仕事だけではなく、ほかのこともなんでもできてしまつてという錯覚に陥りがちです。ところが法律の分野は専門性が高いので、弁護士から見れば簡単なことでも素人判断では処理を間違えて大火事を起こしてしまいます。顧問料が自社の経費の範囲内で収まるのであれば、契約を検討すべきだと思います。

越智 特に昨今はコンプライアンスが重要な経営課題とされるようになって、企業の社会的責任なども厳しく問われるようになってきています。思わぬところから火が出て、経営を揺るがす事態となる可能性はどんな企業にもあります。

北村 労務関係などはすべての企業にかかわる問題です。油断していると、会社の経営が傾きかねないような残業代請求をされることもあります。不動産にまつわるトラブルも多くの企業で起こりうる問題ですが、不動産業者に法律的な処理まで任せてしまつのは極めて危険です。

越智 徳永社長の会社では、北村先生に顧問を依頼する前と今では、何が一番変わりましたか？

徳永 一番は、私自身の中でゆと

理解し、取り組めばいいのでしょうか？

ただくためには、私たちの会社のことを正確に知っておいていただかないといけません。ですから、すべてをさらけ出しても恥ずかしくないように、しっかりと経営に取り組み意識付けにもなつていきたいと思います。

裁判員制度への期待

越智 裁判員制度がいよいよ5月からスタートしますが、私たちはどう

理解し、取り組めばいいのでしょうか？

北村 弁護士サイドから見ると、日本の刑事裁判というのは、裁判官も検察官も役人で、その同じ役人である検察官が起訴してきたのだから、有罪判決を書いておけば間違いないだろう、と考えている多くの刑事裁判官がいます。もちろん全員ではありませんが、4割なのか6割なのかは統計の取りようがないのでわかりませ

りができたことですね。いつでも電話一本で相談できるというのは、ものすごい安心感です。私たちのような中小企業の場合、北村先生が言われるように、経営者自身が法律だ、というような錯覚に陥つてしまいがちです

うに決まっていますが、弁護士の実務をやっていると、私は司法修習生のときから、刑事裁判は危なくてしょうがない、と強く感じていました。民事裁判は双方民事ですから、多くは非常に公平に証拠を見て判断されますから、民事の裁判官に対して私は相当程度の信頼を寄せています。しかし刑事裁判になると、証拠を真摯（しんし）に見ようとせず、公平という感覚がないのではないかとこのうに感じる人が多いのです。これは多くの弁護士の実感だと思えます。例えば1000件起訴されたら、その中には5件か、10件かは無罪の事件があるでしょう。その事件について、裁判員になった方には、何の偏見もなく、証拠をまっすぐに見て判断していただきたいと思えます。これが裁判員制度に対する、私の弁護士の立場からの期待ですね。その一例に、映画では周防正行監督の「それでもボクはやってない」という、痴漢の冤罪（えんざい）をテーマにした映画があります。これは日本の刑事裁判の問題点を突いたもので、これを観れば裁判員制度が目指すべきところが分かるでしょう。

越智 死刑判決のような重い判断を私たち一般の人が迫られるケースも

が、北村先生という存在のおかげで、自分ひとりでも軽々しく判断をするようなことはなくなりました。また、もうひとつの重要な点は、北村先生に相談をしたとき、あるいはなにかことが起こったときに的確な判断をしてい

あると思いますが、大丈夫なのでしょうか？

北村 死刑判決をくだすことはしたくないという方もいらっしゃるかもしれませんが、これは私は間違つた考えだと思えます。日本という国が死刑制度を維持しているのは、治安維持のためです。自分たちの社会を守るためであることを真正面に受け止めていただきたい。刑事裁判官も、無期懲役にするか、死刑にするかで、もちろん悩みに悩んでいます。自分の判断で一人の命を奪つわけですから。ただ、間違えていただきたいのは、ひどいことをした殺人犯を全員死刑にする、という制度ではありません。ひどい殺人犯のなかでも、よりひどくて、ものすごくひどい場合だけ、死刑とするのです。その判断は、ひどい場合同士を比べるわけです。日々報道される中で、なんでこんなにひどいことをしたのにこの犯人は死刑じゃないのか、という批判が出ることもあります。しかし裁判官は目の前の事件だけではなく、いくつもの過去のよりひどい事件と状況や情状を詳細に比較検討しての判決です。ですから、裁判員になった方も、社会を守る、遺族を守る、過去の判例との比較など、いろんな視点から見て、公平はどこにあるのかを見据えた判断をくだ





していただきたいと思います。それが人を裁くということだと思います。

越智 経営者としては、社員が裁判員になったときに、しっかりサポートをしなければなりませんね。

徳永 そうですね。業務面で不都合が出ないように会社としてきちんと対応して、裁判員として集中できる環境を整えて、しっかりと送り出したいと思います。北村先生のお話にあつたように、私たちの社会のことを真剣に考えるまたとない機会ですから、裁判員の経験は人間としてひとまわり成長できる機会を与えてくれるものだと思います。その経験は、私たち会社にとっても必ずプラスになることでしょうか。

弁護士のイメージを壊さぬように

越智 そもそも北村先生がテレビの『行列の...』で法律相談所』に出演されるきっかけは何だったのですか？

北村 『行列の...』の前に、95年から96年にかけて、ちょうど坂本弁護士事件が発覚する少し前くらいですが、弁護士会の野球チームの先輩の

紹介で『ウンナンの桜吹雪は知っている』という金曜夜の番組に出演するのが最初でした。これは芸能人やスポーツ選手の訴えについてテレビ裁判を行い、弁護士とウッチャン・ナンチャンが真剣に証人尋問で対決するという内容で、非常に面白い番組でした。この番組を見ていたプロデューサーから声が掛かって、『行列の...』に出ることになったのです。

越智 最近ほかにバラエティ番組に弁護士の人が出演したり、あるいはドラマや映画で裁判ものが人気を博したりしていますが、実際の法曹の現場とは違うものでしょうか？

北村 テレビに出ていた弁護士はタレント的に見えてしまうかもしれませんが、そういうイメージを持たれるのは私たちにとってあまり喜ばしいことではありません。親しみを持っていただくのはいいことですが、実際、大多数の弁護士はまじめに仕事をしています。そういう仲間のためにも、弁護士のイメージを壊してはいけないという思いがあつて、ですから私はテレビで扱うどんな題材に対しても真剣に取り組むように心がけています。

越智 『行列の...』では『笑わない弁護士』というキャラクターになっていくわけですね。

徳永 麻生太郎先生が首相になる少し前にお会いする機会があつて、その時に私に色紙を書いていただきました。それが「前進あるのみ」という言葉でした。まさに私のためにいただいた言葉で、宝にしています。生きている限りは前進し、会社を引っ張っていきたい。あのときはよかったな、と思つたときは、仕事をやめようと思つています。間違つた道に進みそうになることもあるかもしれませんが、そのときは北村先生やまわりのみなさんに引き戻していただけるでしょうか、私はとにかく前に進みます。

ルフですよ。すぐに結果を求めるから、ストレスがたまると言いますよ(笑)。

徳永 いや、次こそは、絶対北村先生に勝ちますからね。

北村 まあ、社長さんはいたい、みなさんせつかちですからね。



越智 最後に、これからの夢や目標をお聞かせください。

北村 仕事上では、精鋭をそろえた事務所になりたいというのが一番の目標です。趣味の目標は、ゴルフのハンディを取りあえず4にして、ハワイで

るのは、そういう理由なのですね。それにしても、テレビ出演や数多くの企業の顧問、個人の訴訟など多くの仕事を元気にこなしておられるのは、ゴルフや野球などのスポーツで培った体力のおかげなのではないでしょうか？

北村 野球は子どものころから長くやっていますが、これは年齢を重ねると難しいですよ。ぼくににとっては、野球はどんどん下手になっていくスポーツなんです。ところがゴルフは後から始めただけに、やればやるほどうまくなるスポーツで、面白くてしょうがないですね。私たちの仕事は、他人のストレスの請負業みたいなもので、非常にストレスがたまりません。ですからストレスを抜く装置を持っていること

とが大事なことで、私にとってはそれがゴルフですね。

徳永 私はゴルフに限らず、遊びはすべて一生懸命ですね。ゴルフの場合にはボールを飛ばすことが一番好きで、北村先生にはせめて飛距離だけは勝とうと思つて、何日も練習に通いますが、結局、飛距離もスコアも負けてばかりですね。おかげで私はストレスがたまつてばかりです。北村先生が抜いているストレスを、私が引き受けてしまつていいのでしょうか(笑)。

北村 それは考え様ですよ。何日か練習したくらいで、急にうまくなるわけがないんだから。継続して練習して、少しずつうまくなっていくのがゴ



鼎談場所:小倉松柏園ホテル